
片翼の鶴は、空を翔べるのか?

しおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片翼の鶴は、空を翔べるのか？

【NNコード】

N5554X

【作者名】

しおん

【あらすじ】

高跳び選手だった『橋屋 空良』（ハシヤ ソラ）は、事故で左足をなくした。

慣れない義足での生活の中、ある日ソラは事故現場にいた。どうしょもない絶望と悲しみの中、ソラの目の前に一人の騎士が現れた。

そして、次の瞬間…ソラは異世界にいたのだった…。

この物語は、一人ボケ&ソラの少女と、超俺様系騎士

がときにシリーズ、ときにギャグ、ときに恋愛と…本当の愛について考えてくという…青春チックな魔法ファンタジーです。

作者のその日のテンションと気分でキャラ達の性格が変わったり変わらなかつたり…

適当過ぎる物語です。

プロローグ

それは…絶望だった。

高校の秋の新人戦前日。

いつもより帰宅時間が遅くなり、夕日が沈んだ直後。

出会い頭にトラックと衝突。私は新人戦に出られなかつた。

でも、私にとって重要なのはそこじゃない。

私は…

左足を失つた。

私は陸上部に所属している。
主に走り高跳びだ。

中学の最後の大会で優秀な成績を残した私は、スポーツ推薦で陸上競技部で有名な『翠林高校』に入学した。

一年生ながら、私は部内でも指折りの高跳び選手だった。
自画自賛と言われば、これは事実。実際、記録は一年生の中でも秀でていた。

私自身も、自分の実力に自信があった。
高く跳べば跳ぶほど、空にまた一步近づけるような気がして…楽しかった。

記録が伸びる度に、また一步空に近づく。

幼い頃から大好きだった空に、また一步近づく。

これが…私の幸せ…だった。

退院後、私は陸上部を辞めた。

それからは、走ることも…空を眺めることも…陸上を思い出すようなことから、一切の縁を切つた。友人達は、なるべくその話題には触れず、部活の仲間も気を使っているのか、私から離れていった。

私はただ…リハビリに専念した。

そんな事件から2ヶ月。

季節は冬の始まりを予感する11月。

場所は、私があの日事故に合った場所だ。

今の自分の心境に名前をつけるならこうだね。

…『最悪』だ。

委員会の仕事でついつい帰りが遅くなってしまった。
日の入りも早くなり、辺りは真っ暗だ。

プロローグを呼んだ人なら事情は解るだろうが、私には左足が無い。

大抵の親なら車で送り迎えをすると思うが、あいにく私には親もない天涯孤独の身。

今は孤児院に暮らしている。

という訳で、私は事故の後も歩いて通学している。

幸い、進学先は近所だった為通学には困らないが、今日のようないは困る。

最も、それが災いでこんな体になってしまったが…。

なにはともあれ、また事故つて『両足なくしました』。（笑）『なんてことになつたら……笑えねーよー！つか、（笑）じゃねーよー！

心の中で自分の考えにツッコミをいれると…気がつくと、例の事故現場に差し掛かった。

用心しながら足を踏み入れると……

ピカッ

一瞬、自分の半径1メートル以内が白光に包まれた。

何が起きたか分からず、とつぜに扉を閉じた。

数秒後、再び扉を開けるとそこには、一人の青年が膝まづいていた。

青年はゆっくつと顔をあげた。

髪は青に近い紺色で、瞳は夕焼けのような淡い橙色。整った顔立ちをしたイケメンなんだ。

服装は、中世ヨーロッパの騎士を思わせる赤い軍服。腰には剣も装備してある。左肩にはスカンジナビアの腕章が……。

何……アレ。コスプレ？

互いにしばらく見つめあつたのち、青年は口を開いた。

「橋屋 空良だな。」

「……なんで私の名前を？」

青年は質問には答えず、無表情のまま私の肩に手をあいた。

そのままゆっくつと、呪文らしき言葉を唱えた。

「異世界との扉をつなぐ番人、ロジヤループよ。我ルイードの名の元、あるべき世界を示せ。空間移動！！」

青年の掛け声と共に目映い光が私たちを包んだ。

私はあまりの出来事にただ流れに身を任せていたが、白光が私たちを包んだ瞬間、私の左足は急に体重を支えきれなくなり、私はそのままバランスを崩した。

「うわっ！！」

青年の手が肩から落ちそうになつた瞬間、青年は私の体を支えた。

「バカッ！！危ないから俺様から離れんな！！」

先ほどの無表情とはうつて変わり、焦つた表情で怒鳴つた。

オイ…初対面の相手に向かつて…。
大体こうなつたのはこの人の責任じや…。

そうこうしていると、もう一度辺りは強い光に包まれた。

あまりの眩しさに目を閉じたあと、私はそのまま氣を失つてしまつた…。

2・愛する人

ソラが意識を失っている間、話は十年ほどさかのぼる…。

ある世界、ある国に一人の少年がいた。

少年は幼い頃母親を亡くし、父親と五つ年上の兄と暮らしていた。少年は将軍である父親を尊敬し、剣の才能をもつた兄を尊敬した。

少年は一人が大好きだったし、一人も少年を大切にした。

だが…、当時少年のいた国は隣国と戦争の真っ最中。

父親不在がよくあつた。

少年はどうして父親がいないのか、よく兄や使用人に聞いたが、誰も教えてはくれなかつた。

誰も教えてくれないってことは…僕がまだ子どもだから…。

そう考えた少年は、いつしか兄のような剣士になる夢を持つようになった。

しかし、戦況は悪化するばかりで、父親が帰つてくる日はなかな

か無かつた。

少年は一人ぼっちでいることが多くなつた。

父親が庶民出の成り上がり貴族なため、同年代の貴族の友達はほとんどいなかつた。

少年はよく教会に行つた。

教会にある書物をよく読んでいた。

幼い頃母親によく物語を聞かされた少年は、本が大好きだつた。

ある日、教会の神父は言つた。

「そなたには、とてつもない膨大な力をもつ素質がある。だが、その力はあまりに強大過ぎる…。己では抑えきれないくらいの…。」

力。

それは少年が将来もつ魔力。

少年には、魔力をもつ素質があつた。

「なら、どうしたらいいんですか?」

「…愛する人を見つけなさい。そなたのもつ力は愛する人を守る為にあるもの。今はまだ理解するのには早いが…いざれわかるであろう…。」

神父の言つ通り、少年がその言葉を理解するのはまだ先のことであつた…。

三年後、兄は戦場へと旅立つた。

長男である彼が、何故自ら戦いに出たかったのか、少年には理解出来なかつた。

本来、戦場に出る貴族は次男、三男の役目…。家督を継ぐ長男は出なくとも良かつたのだ。

「何故です!! 何故兄上が戦場に行くのです!! 私が…私がまだ子どもだからですか?」

「違う。それは違うよ…。私はただ…愛する人を守る為に戦場に行くんだ。」

「えつ…?」

「以前、教会の神父が言つてただるつ。私にはやつとその言葉の真意が解つたのだよ。」

「僕は…僕にとつて、兄上と父上が愛する人です!!」

兄は少し困つたような笑顔を見せた。

「君にはまだ少し早すぎたかな?」

「愛する人というのは…そういう意味じゃないんだ。」

兄は最後まで真意を教えてくれなかつた。

ただひとつ。少年に解つたのは、兄は何か理由があつて自ら戦いに行つたことだつた…。

そして一年後…。

戦いは王の急死を機に休戦という形をとつた。

少年は父親と兄の帰りを楽しみ待っていた。

一年間。少年は剣の修行をひたすら行つた。
大好きな父親と兄に褒めてもらうために…。

だが…帰つてきたのは、戦いに傷ついた父親だけだつた。

「父上…兄上は？」

「…お前の兄上は…戦いの途中行方不明になつた…。」

大好きだつた兄の行方不明。

この事実が少年の今後を大きく狂わせた…。

一年後、行方不明となつた兄の代わりに少年が家督を継ぐことに
なつた。

家督を継ぐにあたり、少年は神からの祝福を受け、魔力を手にし
た。

更に、三年間魔力を扱いを学院で学んだのち、少年は王宮の女王
陛下の近衛隊に入った。

そして現在、少年は立派な青年となり、若冠十七歳にして近衛隊
隊長に任命された。

それが現在の『ルイード・ジェネソン』の誕生であつた…。

3・見知らぬ空

目が覚めると、そこは異世界だった。

天井は見慣れた木田ではなく、お姫様ベッドの天井。私が寝てるベッドも、一人ぐらい横になれる広さだ。

…ナーハー。ギャグ？ 嫌がらせ？

しばらく状況を把握出来ず、気を失つ前を記憶を無理やり引っ張り出してみた。

えーっと…学校から帰る途中、コスプレイケメンに会つて…あつ…

ソラはここで大事なことに気づいた。

義足…！！！

あわててベッドから両足を出してみると…やはり左足はなかつた。

おやぢへ、あの時に何らかの衝撃によつて壊れたのであら。

あまりの事実にソラは言葉を失つた。

仮にここが異世界だとしたら、この世界に義足はあるのか？

今のソラの脳内はそれだけだった。

もうここがどこでも構わない！！

とにかく今はなんとしても動く手段を考えなくては…。

ソラが片足立ちをして立つたその時だ。

ガチャッ

ソラが立ち上がったタイミングを見計らつたように、部屋の扉が開いた。

「おはようございます。ソラ様。私は使用人の『リーズ』でござります。」

入ってきたのは、一人の女性。だいたい二十歳前後だろうか。

「あっ…おはようございます。」

一歩遅れて私も挨拶をすると、リーズは少し驚いたがすぐに優しそうな微笑みを見せた。

「朝食をこちらで運ぶので少し待つていてください。」

「いっ、いえ！！大丈夫です…！
これくらい片足ケンケンでなんとか…。」

「『』無理なさらないでください。すぐお持ちいたしますので。」

ある意味有無を言わせないオーラのまま、部屋を出てこってしまったので、私は仕方なしにベッドに座った。

ふと足元を見ると、そこには私の鞄があった。

おそれく一緒に持つてくれたのであるが。

中に入れてた携帯を取り出すと、そこにはついた得ない文字が…

「えつ… 圏外? ?」

現代の日本において圏外になるところはそうそうない。山や地下ならまだ可能性はあるが、窓から暖かな光を感じるので少なくとも地下ではない。

うん。断言できる。

一応確認すべく窓に近づき、外を見た。するとそこは見たことない街並みが広がっていた。昔見た中世の世界を舞台としたアニメのよつな…。

「…じゃないか… って問題はそこじゃない… !

これはもう確信した。

ここはやっぱ… 異世界だ。

俺は朝からイライラしていた。

「たつく…ホント能無しばかりだ。」

俺は会議場の警護をしていた。

だが、田の前で繰り広げられる光景は、あまりにも無意味なものだった。

グレジデンツ王国は、君主制の下、議会は一院制の審議院と王によつて構成される。

もつとも、最終的に判断を下すのは王にあるが。

審議院には、上流貴族と軍の役職に就いてる家から四十人王家から指名される。

だが、上流貴族は己の富を蓄える者や、地位と権力に貪欲な者達ばかりで、軍に至つては政治に無関心な者ばかり。

この会議自体が不必要なのである。

更に、追い討ちをかけるよつて女王の病氣。

上から圧力をかける者のいない中、彼らはやりたいほうだいだ。

事実、俺の父親も軍の仕事が忙しいを理由に、ここ数ヶ月まともに議会に出席しない。

故に、ジエネソン家のことなど誰もお構い無しだ。
そんな彼らが何を討論してるかと詫びつと…

ソラのことだ。

彼らはソラが現れたことで、次の王位継承をソラか、女王の弟の

どちらに争うか、争っている。

何故、ソラに王位継承権があるかは、深い訳があった…。

まあ、その話はおいおい…。

父親と違ひ政治にも関心があつたルイードは、話し合いで加わりたかったが…

この能無しの豚共と話し合いなんか、するだけ時間の無駄だ。

そう考えて、警護に徹したのだった。

でも、こんな奴らに俺の警護なんか必要ねえだろ。

本来なら、女王陛下の身を守る為、最も近くにいなくてはならない俺が、ここにいる理由はただひとつ。

女王陛下の命令だから。

直接的に言われたのは、「議会の警護」だが、おやじくその言葉の裏にはある思いがあると俺は考えた。

それが、俺に課せられた本来の使命。

情報収集だ。

病氣で床にふせてる女王陛下に報せられる議会は、おやじく全て都合の良いようになされた偽装書類。

ひとつと摘発すれば良いが… それが出来れば俺はここにいらない。
仮に摘発したとしても、おそらく検査院も貴族達の毒牙に犯され
ているだろう。

今のグレジデンント王国はホントに腐ってる。
早急に手を打たねば…。

* * * * *

時として同じ頃、ソラはある人物に会っていた。

4 私が知らない新事実

朝食を終えたソラに、とある人物が面会を求めた。

ソラとしては少しでもこの世界の情報が欲しいし、何より自分の存在を知ってるということは、自分をこの世界に呼んだ理由も少しは知ってるはずと、考えたからである。

着替えとして、リースから田舎ピンクのストライプ柄のドレスを受け取った。

丈の長さは膝下だが、白いレースが沢山ついており、どう考えてもロリータ受けしやすいドレスだ。

「もつと、シンプルなドレスはありませんか?? (汗)」

「いえいえ。ソラ様のような可愛らしい顔立ちの方には、こちらの方がよくお似合いですよ。」

そうなのだ。

ソラは部活の時以外は大抵髪をおろしているため、その丸顔がよく強調される。

元々若く見られる日本人顔にプラスなので、ソラは年相応に見られることはまず無い。

ちなみに最低で小学五年生に見間違われたことがある。

「それに最近、市井の娘達の間でこの形のが流行っているらしいですよ。」

腑に落ちないソラをなだめるよつて、リーズは優しくつけたした。

結局、ソラの根負けでリーズに言われたようにドレスを着た。

移動の際、ソラはリーズからもらつた松葉杖で、その人物が待つ応接室に向かつた。

廊下を歩いてる時、とにかく今自分がいるこの建物は何かを、視界に入る情報から推測していた。

元の世界を基準に考えたら…中世のヨーロッパの屋敷かな??

いづしてソラは応接室に向かつた。

「お初に御目にかかります。ソラ様。
私は宰相の『コーデリカ・アンジャビス』。『コーリ』とお呼びください。」

私を待つていたのは男装をした、一人の女性だ。
メガネをかけた知的美人で、髪を一本の三つ編みにいてある。

「はじめまして。橋屋 空良です。」

緊張していたのが相手に解つたのか、ユーリは柔軟な笑顔で微笑んだ。

「大丈夫ですよ。そんなに緊張しなくとも。私は貴女の味方です。」

やつ言いつてもひつて、ようやく緊張がほぐれてきた。

男装をしている理由を尋ねてみると…

「ドレスのまま仕事をするのは何かと都合が悪いですからね。」

という返答が返ってきた。

「それでは、まず初めに私達のいるこの国について簡単に説明いたします。」

「一の説明をまとめる」と云ふのは、何うなものだ。

私達のいるこの建物は、グレジデンツト王国の後宮。すなわち、王の家族の居住スペースだ。

この国は立憲君主制の下、女王が治める大国らしい。世界の五大大国に入るくらいだ。

だが、最近は国内での貴族同士の揉め事や、戦争や政治に関する不満で小さな反乱があつたりして、その座も危うい。

題。更に、トップに君臨する女王が病に侵され貴族達は好き勝手し放

まさに、グレジテント王国は崩壊直前の危機なのだ。

までまで…。どうして私にそんな国のごわいじやまで話す…。
…もしかして、私にこの国を立て直して直して欲しいとか？（笑）
いやいや。さすがにそんなアホみたいな話が…

「そうですーーー！」

私達はソラ様にこの国を立て直していただくために、お呼びした
のですーーー！」

そんな話があつたああああーーー？？

「ちよ…何で私の心の中がわかるのーーー？」

「読心術です。」

キッパリとゴーリは答えた。

「この人は一体何者ーーー？」

「で…でもーー私はただの人間だし…そういうのは他の王族の方に
…。」

そこまで言つと、ゴーリは少し真剣な眼差しを向けた。

「ソラ様。その事については心配い無用です。
いきなり私の口から言つのも、恐れ入りますが…時は一刻を争い
ます。」

真剣な姿で言つので、自然とソラの中にも緊張が走った。

「ソラ様。

貴女は…我がグレジデント王家の直系の「息女。
今は亡き賢明王の第一王女でござります。」

私は、異世界の姫だった…。

「私が…異世界のオヒメサマ?」

『お姫様』の部分でつい声が裏返つてしまつたが、ユーリは構わず頷いた。

あり得ない。

そんな非現実的なことがあるわけ……って、この世界に来た時点で非現実的か。

しかし、一つ腑におちない点があった。

それは容姿だ。

ユーリやリーヌを例に、彼女らは元の世界でいう歐米風。すなわち、西洋系の容姿をもつてている。

対する私はどう考へても東洋系。あえてゆつなら、普通より少し肌が白いだけ!!!

黒髪黒目とかはもう…アジア人の証であろう。

つか、それならアジア人の女の子みんなお姫様候補なのでわ…?

「いえ。そんなことはございません。」

「また、読心術!?」

「いえ。今のは声に出でていらしたので。」

「マジで…？」

「先ほども申し通り、ソラ様は間違いなく王家の人物ですし、この世界の人間です。

その証拠に、ソラ様からは強大な魔力をもつ素質を感じます。」

「でも私魔法なんて使えないよ…！」

「それはそうです。

ソラ様から感じるのは、あくまで素質でありまして、魔力 자체は感じません。

この世界で魔力を得るには、一つの要素が必要です。

一つは素質。

その者に魔力をもつ器があるかないかです。

器は一生涯その大きさは変わりません。

そして器の大きさを知るのは、己の限界を知るのも同然です。

しかし、その器にも大きすぎても、それは逆に暴走する危険性が高いこともあります。

でも、それは王族には関係ありません。王族はそれを抑えるだけの精神力が元から備わっているわけです…。

まあ…一部例外もござりますが…。

一つ目は、祝福です。

これは素質がある上でのことです。

この世界の『始まりの神』と呼ばれる四人の神から、祝福を受け

る儀式を行うこと差します。

素質のある者は、祝福を受ける以前から四人の神から何らかの影響を受けたりもします。

以上が、魔力を得る為の要素です。

ソラ様の場合、祝福はまだ受けていないので、魔法は使えないのでしょうか。」

そこまで言つと、ユーリは一人で納得したようになつていた。

…」Jの人、見た目とのギャップが激しいな…。

「魔法のことは理解したけど（一応）、容姿についてはまだつなの？」

ユーリは少し考えて、立ち上がつた。

「口で説明するより、見た方が早いです。」

そう言つと、私をある場所まで案内した…。

「…」Jです。

後宮の一一番奥の部屋。

厳重に警備された扉の前に私達はいた。

「「」の部屋は？」

「女王陛下の……ソラ様のお母上。『フィアーナ・レシアール・グレジデンツ』様の寝所です。」

いわゆる、女王陛下のお部屋だった。

「まてまて。（汗）

こきなり実の母親に会つとか……ハードル高くない…？」

「大丈夫ですよ。

女王陛下も早く会いたいでしょうし。

それに……。」

コーリは、少し躊躇い接続語を言つたのはなかつたことにした。

なんか今更に違和感が…。

だがソラは余りツッコミを入れなかつた。

部屋はソラが使つている部屋とは比べほどにならないくらい、広い部屋だ。

ソラの部屋は、客間のような最低限必要なモノしか無いのに対し、この部屋はカーテンのかかつていてる大きなベッド以外、シックな家具で揃えられた、落ち着く部屋だ。

「…誰？」

カーテンで閉め切つたベッドから声が聴こえた。

「ユーテリカでござります。 女王陛下。」

「あら、ユーリ。 どうしたの?」

「はい。 本日は、あるお方をこちらの部屋にご案内いたしました。」

「……もしかして…。」

ガラツ

カーテンを開け、中から顔を出したのは…自分とそつくりの黒髪黒目の人。アジア系の顔立ちをもつていてる。

元気だったらずござい美人なのに、病氣だからか肌が青白く、どこか幸薄い感が漂う…。

「ソラシア…。」

そう言つと、ベッドから立ち上がり抱きついてきた。

どう対処すればいいかわからなくなれるがままだが、その人は泣いていた。

耳元で何度も「ごめんなさい。」と謝つていた。

「『1』めんなさい、ソラシア。15年間、貴女に寂しい思いをさせてしまって…。母親失格よね…。」

「そんなことないっ…。そんなこと…なによ。…お母さん。」

15年。

本当の親の存在すら知らなかつた私は、自分を不幸とは一度も思わなかつた。

それは一重に自分の周りが優しい人ばかりだつたからだと思つ。孤児院のおじさんやおばさんは私のことや他の子のことを本当の子供のように接してくれたし、孤児院の仲間も兄弟のように仲が良かつた。

私は一人じやなかつた…。

孤児院にいた時間は決して、無駄じやなかつたと思つ。

むしろ感謝してゐる。

おやぢや、この世界でぬくぬくと『オヒメサマ』として暮りりゅうり、ずつとずつと喪かつたと呟つ。

でも。

お母さんはどうだらう。

15年間、離ればなれに暮らして寂しくなかつたのだらうか…。

そもそも、どうして私は異世界に行く羽目になつたのか…。そして、どうやって私を見つけたのか…。

私はそれが知りたかった。

「お母さん…。どうして…どうして私は、お母さんと離ればなれになってしまったんですか…？」

少しの沈黙の後、お母さんに代わってユーリが口を開いた。

「…15年前、この国に大事件が起きました…。」

6・15年分の愛～その1～

それは、15年前のよく晴れた日。この国に新しい命が誕生した。産まれたばかりの赤ん坊は、この世界の古語から『ソラシア』と名付けられた。

意味は『羽ばたき』。『力で羽ばたけるように育つて欲しいから、命名された。

いづれは一国の頂点として君臨する為に…。

だが当時の国は、隣国との戦いの真っ最中。戦況はどちらも五分五分といった状態だった。

そんな混沌としたある月の無い夜。
恐れていた事件が起こった。

当時宮仕えしていた従者や使用人の中に隣国のスパイが潜んでいた。

彼らの目的はただひとつ。

『国王一家暗殺計画』。

当初は情報収集や情報操作の為に送りこまれた彼らだが、国王夫妻に跡継ぎが産まれた為、急きょ指令が下りたのだ。

その日は王妃の誕生日でもあり、王宮内はお祝いムードで警備が手薄になっていた。

彼らはその隙を突いた。

国王夫妻の寝室に襲撃後、混乱に乘じ赤ん坊も殺害するはずであったが、赤ん坊は寝室にいなかつた。

実は赤ん坊はその日乳母の手により、別室いたのだ。
乳母なりに気をきかせかつもりではあつたが、思わぬ事態で役に立つた。

異変に気づいた乳母は、すぐさま王宮を脱出し、ひとまず神殿に避難した。

しかし敵の魔の手はすぐに迫り、絶体絶命の状況にあつた。

そこで神官は乳母にある提案をした。

それは『赤ん坊を異世界に転送する。』という内容だつた。

しかし、異世界に転送する魔法はただでさえ高度な魔法。よほど実力者でない限り、失敗するリスクが高い。
だが背に腹は変えられず、赤ん坊のみを転送することに決めた。
できることなら、乳母も行きたいのはやまやまだが、複数の転送は失敗するリスクが非常に高い。

複数での転送ができるのは、王族クラスの者に限られた。

敵が侵入する直前に転送は成功し、乳母と神官は重症を負つた。
だが、乳母の傷は深くそのまま命を落としてしまつた…。

その後、スペイは全員捕まり処刑された。

神官はなんとか一命を遂げ、夫妻に深くお詫びを申しした後、率先して赤ん坊の捜索に精を出した。

そう。

実は、この時赤ん坊がどここの世界に転送されたのか、神官ですか
解らなかつたのだ。

神官の実力も不足していたのも原因の一つではあつたし、何より
当時は一刻を争う時。ランダムに選ぶほか方法がなかつたのだ。

そして15年。

一つ一つ丁寧に異世界を外から見回ること15年。星の数ほどある異世界からようやく見つけたのだ。

赤ん坊は大きく成長し少女から大人に変わろうとしていた。
見つけたことは嬉しいのだが、時は既に遅し。
なんと左足がなかつたのだ。

神官は己に力がなかつたからこうなつたと悔やんだが、どうやら
事情が違つた。

事情を知つた神官は、その事実を王妃こと現女王陛下に伝えた。
そして女王陛下は我が子をこの世界に転送することを命じた。

母親として、女王として伝えるべきことがあるから……。

ひつしたソラはこの世界に転送されたのだった……。

* * * * *

会議後、俺は女王陛下に会議の様子を報告するため、後宮の一番
奥の部屋に向かっていた。

あ、…やつと終わつたあ。

たく、結局今日も肝心なことは後回しにして…ホント時間の無駄だ。

貴族達はグタグタと己の主張だけして、面倒な決めごとは全て保留にした。

本来ならばその場をまとめるはずの審議院長は、先月亡くなりその座は未だに空席であった。

ガヤガヤ

陛下の寝室の扉の前で、ある会話が俺の耳に届いた。

それは…15年前のあの事件の話だった。

当時2歳だった俺はよく覚えてないが、その頃の女王陛下はかなり憔悴しきっていたのを今でもよく覚えてる。

だが…何故急にこの話を…？

中からは3人の声が聴こえる。いずれも女の声だ。

1人は聞き慣れた女王陛下のお声。もう1人は母の旧友であった現宰相の声。

もう1人は……。

ルイードは全て理解した。

おそらく、アイツに全てを話しているのだろう。

事前に事情を知っていたルイードは、すぐにわかった。

だが、一介の騎士が何故王家のトップシークレットを知っているのか…そこには深く絡み合った血の流れがあった…。

『そんなこと…私には無理ですっ……』

扉から大声が響いた。

ルイードは近衛兵としての義務を果たすべく、扉を開けた…が、
どーん

ルイードが扉を開けたと同時に中から人が出てきて、ルイードと
その人はぶつかり、互いに吹っ飛ばされた。

「イテテ… オイお前…。」

ルイードは血ら体を起こすと、相手の方に目をやった。

ルイードの目に入ったのは、黒髪に黒目の少女。

昨日連れてきた娘だ。

「イタタ…あつ…」めんなさい……つてあ、……つ……

娘はルイードの顔を指差し叫んだ。

「昨日の性悪コスプレ騎士……」

「誰が性悪だ……誰が……」

「またく……コスプレってなんだ？」

娘はあわてて口をふさぎ謝った。

ふん。当然だ。

「あらあら、ルイースまでビックリしたの？」

入り口で騒いでゐるこ~~そ~~の女王陛下がやつてきた。

「はっ！申し訳ありません、女王陛下……！」

最上級の敬礼の前に、女王陛下は一人を招き入れた。

7・15年分の愛／その2

部屋の中は微妙な空氣に包まれた。

女王陛下はベッドに座り、先ほどからつむいでいる。何故かこの場にいた宰相のアンジャビス様は、難しい顔をして黙っている。

んで、どうみてもこの空氣を作った張本人ことソラは、アンジャビス様の向かいのソファーに座り、同じく黙っている。

俺は職務中のこともあり、ソファーに座らずその様子を眺めていた。

だが…あまりにも空氣が重すぎため、直接張本人に問い合わせた。

「オイ。 一体何があつたんだ。」

「まあ…色々あつまして…。」

「色々とは？」

「…てゆーか、あのさ。 なんで貴方に言わないといけないわけ？ 大体貴方、初対面からずっと私のこと呼び捨てだし…。 理由が知りたいなら、まず自分の名前を名のつて。」

「お前…俺様が誰か聞いてないのかつ……！」

「いひつ……！」

「 もううんよーー。」

当然のようソラは答えた。

「 ああ、忘れてましたね。」

アンジャビス様は思い出したように、顔を上げた。

「 彼は『ルイード・ジエネソン』。ジエネソン将軍の、いじ子息です。ソラ様から見れば…又従兄弟に当たります。」

「 えつー? 親戚??」

「 やつと思い知ったか。愚か者。

お前の父親である前国王と、母上が従兄弟なのだ。」

そう告げると、ソラは粗か様嫌そうな顔をした。

氣を取り直して、ソラに事の始まりを質問した。

「 どうして私を呼び出したのか理由を聞いたの。」

時間は数分前に戻る…。

いまいち実感が湧かないのが事実だ。

ぶつちやけた話、田の前にいる人が実母なのも、私が異世界の才ヒメサマなのも…
全てが理解できなかつた。

でも、私に血の繋がりをもつ家族がいるといつ事實は、この上なく嬉しい…。

15年たつた今でも、私の存在を忘れないでいてくれたことは、言葉にできないくらい心が満たされていた。

出生の話が終わつた後、お母さんと私は向かって並んでソファーに座つた。

お母さんは緊張した表情だ。

「ソラ・シア…いえ、ソラ。貴女に大切なお話があります。
既にゴーリから聞いたとは思いますが…、はつきり言つて貴女に王位を継承…つまり次の女王になつて欲しいのです。」

「お言葉ですが、それは無理です。」

私は即答した。

お母さんもゴーリも当然の返答だと、理解してゐみたいだ。

それでもお母さんは諦めない。

「私には…時間がないのです。」

私は元から体は強くありません。現在も女王とは駄目ばかりで…実際は職務放棄です。

この国は荒れています。

それは政治の面だけでなく、福祉や教育等も同じです。

貴族たちは、王家の人物ではない私を非難し、好き勝手し放題です。

でも…グレジントン王家の血を直系で受け継いでいる貴女ならどうでしょうか?

彼らはきっと非難できないはずです。

お願いします。ソラ。

どうか…この国を救つて…」

必死の表情でお母さんは訴えた。

私は困惑した。

正直な話、今まで親孝行なんかしてなかつたから、私に出来ることがならしたかつた。

でも…

あまりにも荷が重すぎる。

女王なんて私には無理だ。

今まで普通の女子高生として生活してきたのに、急に異世界。しかもオヒメサマ。

話が飛びすぎだ。

そう考えたら、急に元の世界が恋しくなった。

学校の友達はどうしてるか…
孤児院のみんなは大丈夫なのか…
考えだしたらきりがない。

「私は…元の世界に戻れますか…？」

二人は表情が険しくなった。

「ソラ様…実は、魔法の発動中何らかの事故により魔法は暴走。
現在修復が完了する目処は…立つておりません。」

…それは…いわゆる…

「私は…帰れない…ですか？」

それは、私にとつての『死刑勸告』そのものだった。

体から力が抜けた。

泣き叫ぶとかそんな体力はなかった。

ただ、その事実を必死で理解しようとした。

頭では理解したが、体はそれを拒んだ。

目からは涙が溢れ、声を出さないようになるのに必死だった。

お母さんは私を抱きしめようとしたが、私は拒んだ。

体が急に拒否反応を示すようになった。

なんとか泣き止むと、コーリは言った。

「…今現在、問題を打破できないならば、私達に力を貸してはいいだけないでしょうか？」

「ソラ様。」

私の中で何かが切れた。

「そんなこと…私には無理ですっ…！」

「…」
そう言つて出ていこうとしたら、アノ性悪コスプレ騎士にぶつかつたのだ。

ルイードさんに言われるがまま、事の有り様を説明した。

口から出していく言葉はまるで他人事のように思えた。
それと同時に、少し冷静になれて自分の心に整理がついた。

でも……やつぱり……。

「でもやつぱり……出来ることなら、元の世界に戻りたいです……。」

その言葉を聞くと、ユーリとルイードさんは少し残念がった。

「ユーリ、ルイード。」

お母さんは立ち上がった。

「あなた方一人に聞きたいあります。
あなた方第三者から見た意見はいかがですか？」

二人は急に話をふられ戸惑つたがすぐに考えた。

最初に結論をだしたのはユーリだ。

「魔法の修復が完全でない以上、せめてそれまでの間は…ソラ様に
御即位を願いたいです。」

本音を語つとコーリの意見には、少し納得していた。

長い間のトップの不在は混乱を招く。ただでさえ貴族達が我が儘放題にしてるのに…最悪革命が起きる。響きは良いが、国家の実態を知らない国民が行つ政治など、それこそ悪徳貴族達の思うツボだ。

この国は確実に崩壊の道を辿る。

次にルイードさんが口を開いた。

「…確かに、統べる者の不在は極めて危険です。
ですが…ソラは頂点に立つ者としての教育を受けていない身。これも、ある意味無謀な挑戦なのでは無いかと思います。

「…いら王家直系の血を引いて…中身がなければ意味がありません。
すぐに貴族達の反発を喰らひついでしょ。」

私は驚いた。

さつきまであんなに私のこと毛嫌いしていたのに…。
シンデレか?

「ではどうするのだ?」

「…今しばらくは王位に立つのは控えるべきです。

政治的に不安定な今、ソラが表立つのは…反発どころか暗殺すら考えれます。

隣国との戦いも終わったわけではあつません。」

ルイードさんの最後の一言に、わすがのコーリも唸つた。

…お母さん…。

「わかりました。…私の負けです。」

お母さんは潔く根負けした。

「コーリの言つ通り、女王としては…今すぐでも即位してもいい
たいです。

でも、それはあくまで『女王』として。

一人の母親としては……我が子を…危険な身にさせたく…あつ
ません。」

一筋の涙がこぼれた。

「…ソラが無事即位が出来るまで、私はこの身が滅びるまで戦つ
つります。」

それが…私から貴女に送れる最大の愛の形なれば…。

お母さん…。

ずっと氣がかりだつたことがある。

何故、お母さんは“この身が滅びる”とか言つだらけ。

『私は元から体は強くありません。』

『「」の身が滅びるまで戦つつもりです。』

『大丈夫ですよ。

女王陛下も早く会いたいでしょうし。
それに……』

ユーリが言いかけた言葉の続きを……。

「お母さん……一つ……？」

ある仮定が浮かんだ。

神様……

「もしかして……」

お願いします。

「お母さん……」

じつか……

「もうすぐ……」

……連れて行かないで……！

「……こなくなるの？」

神様は私を裏切つた。

「……はい。」

「私は体が生まれつき弱いですが、魔力はこつ見えて強大です。ですが、肉体が魔力を抑えきれず、最近はあまり体を動かせません。」

『女王』という職業上、不規則な生活は仕方ないのですが……今まで無理していたのが駄目だったのでしょうか。

自分でもわかるんです。

そろそろ……限界が近づいていることを。」

お母さんのカミングアウトに私の心は揺れ動いた。

自分のワガママを押し通し、元の世界に戻るか。

その場合は、こことの縁はバッサリ切るはめになるだらう。

せっかく会えた家族なのに……そんのは死んでも嫌だ！！

この世界に留まるとなつても、いざれば必ず王位を継ぐだらう。そしたら、逆に『元の世界に戻る』という選択肢は捨てなければならぬ。

今までの苦労も無駄になるね……。きっと……。

「私は……『失礼しますっ！……』って、はい？？」

部屋に飛び込んできたのは、ルイードと同じ軍服に身を包んだ、

可愛らしい顔をした子供だ。

金髪に澄んだ碧眼で、長い髪を後ろで結んでる。

「うわあ～、可愛いいいなあ。女の子かな？？つて、それビビrijじゃなくつて！！」

「どうした？Hーベル。女王陛下の前だぞ。」

「しつ師匠……もつ申し訳ありません……ですが……緊急事態なものでつ……」

Hーベルと呼ばれた女の子は、ルイードさんに頭グリグリされながら、何が緊急事態なのか簡潔に報告した。

「現在」テモ隊が王宮前広場に向かつて行進中……王宮直属の騎士団が対応に当たつてますつ……」

そして師匠は手を止めてくださいつ……痛いですから……」

「何を言ひ。せつかくこの俺様が可愛がつてんだ。ありがたく思え。ついでに俺様はお前の師匠じやない。」

「だからつてやりすぎです……頭蓋骨が粉碎しますつ……」

「大丈夫。直前で止める「師匠つー？」」

ユーリがルイードに喝を入れて、女の子は解放された。

「なんだろう……この二人……疲れる……。

「んで？」テモ隊が来てんだつて？？なんで？？」

「どうせ、悪徳貴族達に対する怒りがこっちに向いたんだろ。」

ルイードさんは女の子から手を引くと、苛立ちながら説明した。

「貴族達はいわゆる王の手先だ。貴族達の行動は王意志みたいなもんだ。」

「でも、お母さんは何もしてないよ。」

「無知な民衆のことだ。大方、その悪徳貴族達に何か吹き込まれたんだろうよ。」

そんな……。そしたら……お母さんが可哀想……。

ガヤガヤ……

窓から人混みの声が耳に入った。

私は、ルイードさんに肩を貸してもらいながら、バルコニーの窓から様子をうかがった。

そこには、小さな赤ん坊を抱えながら訴える若い母親や、自分と同じ五体不満足の人、瘦せこけた人々が口々に何かを訴えていた。

「これが……この国の現状だ。」

重々しくルイードさんが口を開いた。

「なんで…。」

基本的平和な日本で育った私には異様な光景だった…。

＊＊＊

ソラが外の様子を見たいと言ったので、ありがたく俺様の肩を貸してやつた。

窓越しだが外の様子を見たソラは困惑した表情を浮かべた。

俺は「コイツがいた世界は全く知らないが、コイツの様子から察するにほど平和ボケした世界だったみたいだ。

ソラは一言「なんで?」と言つと、黙つて外を眺めた。
そして意を決したように口を開いた。

「ルイードさん…私を……外に出させてください。」

漆黒の夜空と同じ色を持った瞳で俺を見つめた。
その目は真剣そのものだ。

「私は、皆さんと話がしたい…。皆さんが何を望んでいるのか知りたい…。

「この国と…お母さんを…守りたいっ…！」

田に涙を溜めながら俺に訴えた。俺の肩をつかむ左手に力をいれ

…。

「この瞬間、俺はコイツに心を奪われた。国民を思つ気持ちをやつと誰かと共有出来た気がした。」

「たく…しようがねえな。」

口元が緩むのがわかつた。

ヘルベルは驚いて口をだらしなく開けている。女王陛下とアンジヤビス様は微笑ましい表情を浮かべてる。

「そ…俺様としたことが…。」

不覚だつたが、悪い気はしなかつた。

「それじゃ…行くぞ」「お待ちください…」って…あ、あ、?/?

「誰だ…」れからいいとこなんだが…。

「お久しふりです、女王陛下。」

図々しく部屋に侵入してきたのは、つり目でガタイの良い白髪混じりのオッサンこと、財務大臣の『ジョスラン・コーデ・イベール』。

「この国の諸悪の根源だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5554x/>

片翼の鶴は、空を翔べるのか？

2011年11月23日06時50分発行